

看護技術と対象理解

Understanding the Subject in Nursing Art

升田 茂章

奈良県立医科大学医学部看護学科 実践基礎看護学

Shigeaki Masuda

Nara Medical University Faculty of Nursing, Practical Fundamental Nursing

要旨

近年の科学技術の発展は目覚ましく、2045年には人工知能(Artificial Intelligence: AI)が人の知性を超える「技術的特異点(Technological Singularity)」シンギュラリティを迎える(Ray Kurzweil, 2007. 浅井, 2018)といわれている。すなわちあと数年でAIと人間は同等レベル(プレ・シンギュラリティ)となり、今後20年AIの活躍は人の生活において今よりも目を見張る世界となるだろう。20年前に道で人が携帯電話(現在のスマートフォン)に相談している姿を想像できただろうか。冗談でささやかれていたことが現実味を帯びた中で、私たち看護職者は「新しい技術」と「受け継がれてきた哲学」との間で何を取り入れ何を残す必要があるのかを考えてみたい。実際、医療業界の科学技術発展による躍進は、外科手術が開腹手術から腹腔鏡手術、Da Vinciによるロボット手術になるなど、ここ20年での変化は目覚ましいものがある。科学技術が発展していく世界で、看護の対象とされる個人、家族、集団、コミュニティの中から、看護者と個人:対象者の間を繋ぐ基盤としての対象理解に着目し一部インタビュー内容を交えながら再考した。

キーワード:看護技術、対象理解

I. 看護における対象理解

わが国の看護における対象理解に関する研究は、医学中央雑誌によると1990年以後継続して行われており、研究対象は様々であるが2024年時点で原著論文が350件以上認められる。対象理解の中でも、個人に対する対象理解は、看護者として相手を理解する主観的な理解と相手の立場に立ち相手の体験している世

界を理解するという部分があると考えられる。それは決して主観と客観という二分法的世界ではなくもっと複雑な世界といえるだろう。看護者は、相手の見ている世界を捉えつつ、自身が見た世界から対象者(相手)にとって最善の看護技術を選択することが専門職としての看護の技となる。すなわち、看護のメタパラダイムである「人間」「環境」「看護」「健康」(Fawcett J, 2008)

では、その「環境」の中で「健康」に課題を抱え生活を営む「人間」を理解し、生命エネルギーの消耗を最小限にするように、且つ自然治癒力が最大限発揮できるよう「看護」を行うことが重要である。この考え方は Fawcett のメタパラダイムの概念間の関係、命題とはやや異なるかもしれない。しかし、著者は看護者が相手にとって最善の看護技術を選択するためにはまず看護の視点で対象を理解することが看護技術を行うための看護の軸になると捉えている。

対象理解は看護者間でも共有しづらい部分であり、他者から看護者の対象理解のあり様(各看護師の対象理解の仕方)は、目で見える部分(対象を捉えた結果)が看護技術の内容や実施した結果で現れるため、対象理解の内容はわかりづらいことが多い。

II. 科学技術の発展に伴う看護技術への影響

近年テクノロジーの進化に伴い看護技術も変化してきている。科学技術の進化はこれまで観察と表現され私たちが肉眼で見ていた世界を一変し、これまで見えなかったものを可視化することを助けている。これは重要なポイントであり、可視化することで、これまで慣習的に行われてきたような看護技術を選択する際の新たな理由となり得たり、実施した看護技術の評価を可視化したデータで行うことで、根拠に基づいた看護技術に繋がると考えることができる。例えばエコーは身体内部の構造や機能の評価するために重要な役割を果たしている。日本の看護学領域では 2000 年頃から徐々に研究されるようになり 2013 年から増え始め、携帯型(ポケット)エコーが開発された後に簡易性や利便性からさらに研究が増えている。注射後の硬結についての観察(高橋, 2016)や膀胱内尿量の残尿評価(正源寺, 2016)、採血時の血管選択についての観察(原, 2020)などの研究がおこなわれている。また、その他の可視化できるデータを用いた看護技術の効果指標としての研究には、ハンドケアの影響について唾液アミラーゼを用いた研究(渡邊, 2015)やシャワー浴中ソープ泡の断熱効果を指尖皮膚血流量変化でみる研

究(大西, 2021)が行われている。このように、これまでは対象者の主観的評価や表情、バイタルサインで効果検証を行っていたことが、評価により根拠を可視化しケア技術のエビデンスとしての基盤形成をするように変化してきている。

しかし、いまだ看護者の対象理解のあり様を視覚化・数値化する術は当然なく、どちらかというと電子カルテや記録の省略可によってますます埋もれてしまいかねない状況であると言っていいだろう。「看護技術において人間関係は重要な要素」(菱沼, 2024)と言われているが、看護者と対象者(患者)の人間関係について、意識して記録することがあるだろうか。おそらく客観性に重きを置く世界では主観的と捉えかねない人間の関係性は記録から削ぎ落されている可能性さえある。

何度も述べるが人間関係の礎としての対象理解は最も基本的な部分として重要であるが見えない部分である。

III. 看護技術と対象理解

看護における対象理解と看護技術について、川島は、「看護技術の本質として看護技術とは看護実践における客観的法則性の意識的適用」と述べている(川島, 2012)。このことは、対象を理解した上での原理・原則の意識的適応、その柔軟性と捉えることができる。この技術の捉えは、武谷の「技術とは人間実践(生産的実践)における客観的法則性の意識的適用である」(武谷, 1974)から導かれている。この武谷の技術論について、池川は『「技術は人間実践(生産的実践)における客観的法則性の意識的適用である」という定義について、「何が技術であるかを示す最も重要な行為的部分が、単に「適用」ということで片付けられていいのか」』(池川, 1991)と述べている。また、「看護技術の本質は、看護師と病人とのかかわりという具体的な現実(reality)のなかで、自・他を発見し、関係の中で相互に了解しあうという人間的な行為の過程そのものにある。」(池川, 1991)と、その看護職独自の相互性が専門性であることを見出し、それ故「科学的に実証された事実や手順のみ

を技術として見ていくのであれば、看護実践における技術の本質に触れることができず、そこでの技術は物だけ、手段だけに矮小化されると言わざるを得ない」(池川, 1991)と指摘している。なお、池川は著書の中で技術の意識的適応について、看護技術の科学的実証性を高め看護の専門性を高めることに貢献することを認めており、看護職の行う看護技術の専門性、すなわち本質により近づくために問題提起をしたものであると捉えることができる。

川島の述べた看護技術の意識的適応に対して、池川は、「意識的適用」の部分に最も看護の行為(本質)としての技術が現れると述べている。あるインタビューから看護者自身が意識下で実施している看護について捉え「患者側からみた世界」と「看護者のみた世界」について述べ、それぞれの世界の違いから今後の看護者の個人への対象理解の一助となればと思以後に示す。

IV. 看護師の対象理解による「患者の読み取り方」と「当事者の世界」

A氏インタビューより:

「挿管中の世界」と「看護師の対象理解」

A氏は一晩ICUで挿管中に看護師とのやりとりの中で驚かされた出来事があった。挿管し両手首を抑制した状態であったA氏に対して、担当看護師はセデーション中で反応もない中、何度も声をかけてくれた。また、入室時に今後の予定を説明してくれていたことを後から思い出したと語っている。挿管翌日、MRIかCTを撮ってから抜管することを説明してくれており、当初ははっきり理解できていなかったが、うっすらとした記憶の中で、「この状態で検査に行くのはきついな」と思い、翌朝には「あれ？撮影後抜管することをなんで自分は知っているのだろうか？」と、看護師がICU入室時に説明してくれていたことを思い出した。この担当看護師は、夜間吸引時にもよく声をかけてくれていたと言う。挿管チューブから気管吸引後に、「他に何か気になることはありませんか？」と聞いてくれたのだが、挿管され抑制されているA氏は

「いやいやどう答えたらよいのよ？」という無力感に苛まれつつ、少し気になったことがあったので、少しだけ動かすことができる右手首先を使い、表現できているかどうかもわからない状況の中、右手の人差し指で円を描き、円の真ん中を人差し指先端でちよんちよんと示した。看護師には絶対にわからないであろうし、このあとわからない(通じない)という世界が繰り返されても仕方ないなど考えていたらしいのだが・・・、担当看護師は「口の中が気持ち悪いですか？」と訴えたいことを見事にわかってくれた。A氏が右手の親指と人差し指でオッケーサインを出すと、口腔内吸引を実施し、その後は毎回気管内吸引と口腔内吸引どちらもしてくれるようになった。「担当看護師にあの時なぜわかったのか聞いてみたいという思いが強く残っており、ずっと話しかけてくれていたし、恐らく自分からのメッセージを読み取ろうとしてくれていたから理解してくれたのだと思う」とA氏は語った。

池川の述べるように、看護技術は相互性を持っているものである。今回のA氏の事例では、この夜勤担当看護師は恐らく淡々とA氏の状況をつかみ、当然A氏がオッケーサインをだしても予測していることとして自然に口腔内吸引をおこなっていたと考えられる。このような自然に行われている看護技術・看護実践の深さは中々言葉として表出されない。

V. A氏の体験から対象理解を考察する

科学技術の進歩の中で、看護独自の活動として対象理解に着目しこれまで述べてきた。世界の機械化の中で、以前は人の深みにAIが対応することは難しいのではないかと考えていたが、最近のAIの働きはパターンではあるが受け手には気配りの域に達しているような気がする。だからこそ、もう一度看護職は対象理解についての独自性を明らかにする必要があると考える。池川は看護職者の対象とのかかわりについて「自他を発見し、関係の中で相互に了解しあうという人間的な行為の過程そのものにある」と述べているように、他にも「関心をよせる」「相手の立場に立つ」等、色々な表現で対象理

解のあり様を深める試みがされている。今回これまでの看護技術・対象理解についての概観、A氏のインタビューを踏まえ看護職の対象理解について再考したが、看護職が独自の役割を担うことを考え、今後も状況看護技術の革新への対応と共に看護の基盤としての対象理解について、教育活動および研究を継続しくことを考えている。

申告すべき利益相反なし

文献

- 浅井哲也(2018): 情報・神経科学とものづくりの学際融合による人工知能ハードウェア, *日本神経回路学会誌*, 25(4): 148-156.
- Fawcett J(2008): フォーセット看護理論の分析と評価, 訳: 太田喜久子, 筒井真優美, 医学書院.
- 原明子, 土肥美子, 川北敬美, 他(2020): 看護学生における血管可視化装置および血管エコーを用いた静脈血採血演習の評価, *日本シミュレーション医療教育学会雑誌*, 8: 63-69.
- 菱沼典子(2024): 看護技術と看護職と患者の人間関係からみた看護実践のプロセス 看護職の視点から, *日本看護技術学会誌*, 23: 1-7.
- 池川清子(1991): 看護 生きられる世界の実践 知, ゆみる出版: 80-82, 89-97.
- 川島みどり(2010): 看護技術とは何か; 技術論からの再考, *臨床看護*, 36(10): 1514-1519.
- 川島みどり(2012): 看護の“TE-ARTE”, *日本看護学教育学会誌*, 22(2): 91-100.
- 大西範和, 松島至俊, 西濱里英, 他(2021): 介護入浴向け泡シャワー装置で放射したソープ泡の層が洗身時の皮膚血流量と体温に及ぼす影響, *人間工学*, 57(4): 194-201.
- Ray Kurzweil (2007): ポスト・ヒューマン誕生 コンピュータが人類の知性を超えるとき, 訳: 井上健, 小野木明恵 他, NHK 出版.
- 正源寺美穂, 臺美佐子, 須釜淳子, 他(2016): 各種ポケットエコーによる経時的な膀胱内尿量および残尿評価の試み, *看護理工学会誌*, 3(2): 118-122.
- 高橋有里(2016): 精神科における徐放性製剤に起因した硬結の発生状況と関連因子, *日本精神保健看護学会誌*, 25(1): 1-11.
- 武谷三男(1974): 弁証法の諸問題, 勁草書房: 139.
- 渡邊久美, 國方弘子, 三好真琴(2015): 精神障害者へのハンドケアリング前後の変化 自律神経活動および不安, 対人距離の心理的指標から, *日本看護科学会誌*, 35: 146-154.